

# レポート連続講座『ふたつの隅田川』

## 【第1回】オペラ「カーリュー・リヴァー」～ベンジャミン・ブリテンと能「隅田川」～

ある狂女が都からわが子を探してさすらい、隅田川に辿り着く。しかし、人さらいにさらわれたわが子は、病気になって死んでしまっていた。きょうはちょうど一周忌である。墓の前で泣きながら念仏を唱える母。すると、墓のなかからわが子の声が響いてくる――

1956年、来日したイギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンは能「隅田川」に感銘を受け、のちにオペラ「カーリュー・リヴァー」を作曲します。一方、大正時代に二代目市川猿之助（初代猿翁）によって舞踊化された清元「隅田川」は、時を経て昭和の名女形・六世中村歌右衛門の愛する演目として上演を重ねました。

『隅田川二題』～能から生まれたふたつの『隅田川』～として、オペラ「カーリュー・リヴァー」と日本舞踊・清元「隅田川」が、3月KAAT神奈川芸術劇場で上演されます。上演を前に4回にわたって開催される関連講座「ふたつの隅田川」が、1月13日にスタート。第1回は、ブリテン研究家の向井大策氏と演劇評論家の村上湛氏によって、「カーリュー・リヴァー」誕生の背景と特徴、そしてその発想のもとになった能「隅田川」の特異性が語られました。

“目から鱗！”の視点、とっておきのお宝情報が2人のエキスパートによって存分に披露された講座から、「注目ポイント」をご紹介します。

### 【注目ポイント！】

#### ① なぜ「隅田川」が「カーリュー・リヴァー」に？ 「カーリュー」ってなに？

オペラの台本を書いたウィリアム・プルーマーが付けたタイトルは「スミダ・リヴァー」。ブリテンは、物語の舞台を「隅田川」からイングランド東部の沼沢地に移し、そこに流れる川を「カーリュー・リヴァー」と名付けて、オペラのタイトルにしました。「カーリュー Curlew」とは、ダイシャクシギという鳥の名前。イギリスに生息する渡り鳥で、死のイメージがある鳥とされています。

#### ② ブリテンと日本の出会い：1956年の演奏旅行

すべては1956年2月、ブリテンがテノール歌手ピーター・ピアーズとともに、中東・東南アジアをめぐる演奏旅行の一環として来日したことから始まりました。歌舞伎、雅楽、能を鑑賞した作曲家の心を特にとらえたのが能「隅田川」で、短い滞在中に2度舞台を見に行き、「これまでで最もすばらしい演劇体験だ」と述べたほどです。また京都では雅楽の楽器、笙を買い求めました。「カーリュー・リヴァー」は、能をキリスト教の視点で解釈し、日本音楽や東洋演劇の影響を受けつつ、自らの故郷であるサフォークの教会で上演するために作曲されたオペラ――時代を超えた不思議な物語の世界は、こうして生まれたのです。



#### ③ 小編成で豊かな音色を紡ぎ出す「ブリテン・マジック」

「カーリュー・リヴァー」の音楽を奏でるのは、数名からなる室内アンサンブルです。その小編成アンサンブルから、大オーケストラに負けず劣らずの、驚くほど豊かで多彩な音楽が紡ぎだされていきます。これぞ、楽器の特性を知り尽くしたブリテンのマジック。そして狂女にはフルート、船頭にはホルン……というように、各キャラクターに楽器が割り当てられているのが、このオペラの特徴です。

#### ④ 能における「狂女」とは、「芸能者」「神や仏の靈魂の語り部」

ブリテンのオペラでは“Madwoman”と書かれた「狂女」役ですが、能における「狂女」とは、「芸能をなりわいとする者+神仏の靈魂の声を聞く者」という意味を持っていました。芸を見せるのは本来恥ずかしい行為であり、それをあえて行うのは「尋常な状態ではない」ことが意味に含まれていたのです。「狂女」はまた、神や仏の靈魂の語り部であり、霊媒師的な性格も投影されていました。

## ⑤能「隅田川」は独創的かつ“異常”な傑作



神や仏の声を聞く人間が主人公の「狂女物」の能が、通常「神や仏の救い」で終わるのに対して、この「隅田川」は「神仏の救いを否定」している点がきわめて特異な設定です。死んだわが子は戻って来ず、母の絶望は絶望のまま幕を閉じます。定型からはずれた“異常な”傑作と言えます。作者・観世元雅は、今年生誕650年を迎える世阿弥の息子で、父の名声を受け継ぎながらも、父とは明確に違う個性で優れた能作を残しました。元雅の独創性が遺憾なく発揮されているのが「隅田川」のクライマックスです。繰り返される念仏のコーラスのなか突如として響く、亡きわが子の声。それは母の幻聴ではありませんでした。

## ⑥隅田川は「果てなき世界の果て」

隅田川にはどういう意味が込められているのでしょうか？ 隅田川は、武蔵と下総の国境を流れる川ですが、和歌の世界で武蔵野には「果てなき野原」のイメージがありました。隅田川とは「果てのないはずの世界の果て」であり、その先はこの世ではないという「生死の境」でもあるのです。能「隅田川」の元になった『伊勢物語』第九段「東下り」は、「身分の高い人が都を捨て、遠く離れた地までさすらう物語」と言われますが、それだけではなく「人間の生死の運命の旅を説く隠喩」とも言えます。

## ⑦能「隅田川」は「絶望の物語」なのか？

狂女がわが子の一周忌に巡り合ったのは旧暦の3月15日。現在の4月中旬からゴールデンウィーク過ぎにあたる時期です。芽が吹き枝が繁り草木が栄える――喪失感に打ちのめされる母が立つのは、そうした自然の癒しに溢れエネルギーに満ちた野原でした。たとえばこれが晩秋であれば、全く救いのない世界になったことでしょう。砂を囁む現実でありながら、人間を取り巻く世界はなんと豊かに栄えていることか――たとえ神仏の功德はなくとも、自然のなかの人間がいかに卑小な存在であるか、だからこそどれほど命が尊いかを説いた点で、能「隅田川」は単に絶望に終わる作品ではありません。「絶望のなかに救いを見る」、かつ「神仏が介在しない人間の物語」であるところに元雅の意図があり、この作品の価値があるのです。

ブリテンの「カーリユー・リヴァー」、日本舞踊・清元「隅田川」は、能「隅田川」からなにを受け取り、どのように変容させていったのか、今後の連続講座にご期待ください！

第2回：指揮者によるオペラ「カーリユー・リヴァー」 曲目解説 2月8日（金）19:00 大スタジオ

第3回：川と芸能 ～“隅田川もの”の系譜と清元「隅田川」～ 2月24日（日）14:00 中スタジオ

第4回：花柳壽輔 × 宮本亜門 トークセッション 3月2日（土）11:00 中スタジオ

**チケットかながわほかで好評発売中！！**

**隅田川二題 ～<オペラ>カーリユー・リヴァー / <日本舞踊>清元 隅田川～**  
2013年3月22日（金）19:00・23日（土） **KAAT 神奈川芸術劇場** 〈ホール〉  
【チケットかながわ】045-662-8866(10:00-18:00)